

ゆめ ぐらむ 夢 立軍

菅波 茂

2016年8月31日、学生では外科視4人、内モンゴル首都のウランバートルからゴビ沙漠の大草原を四輪駆動車で10時間走り続け、南西約500キロにあるウブルハンガイ県グチンウス村に到着した。人類愛善会の推進する世界連邦都市宣言自治体モンゴル第1号である。人口は460世帯で2300人。

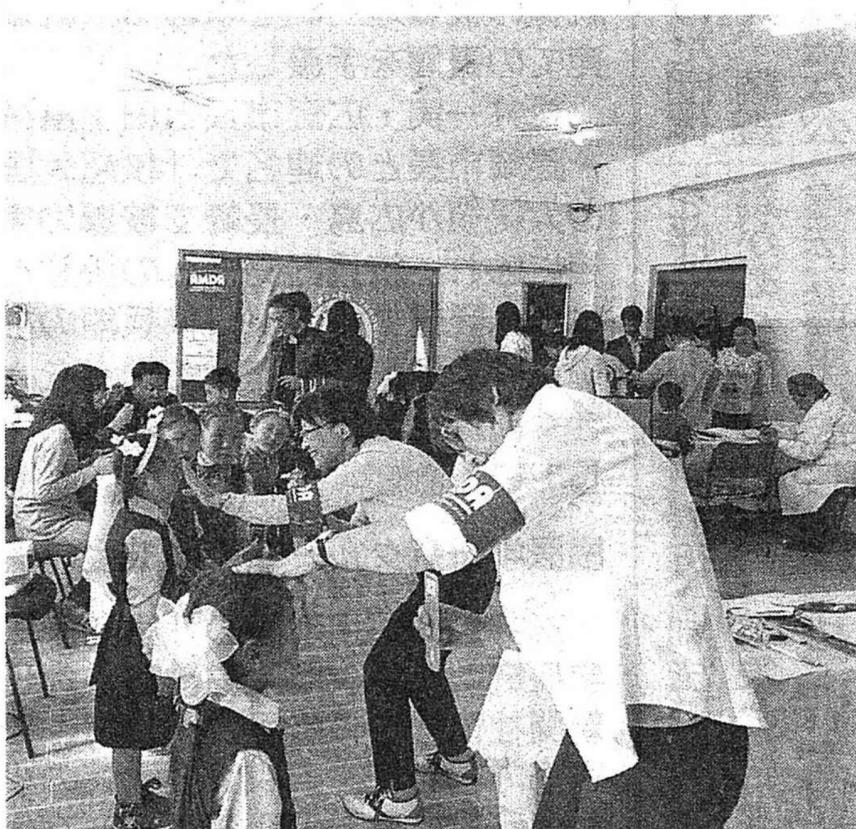
9月1日は小中学校の入学式。華やかな式の後、グチンウス村幼稚園から高校生、成人の村人まで221人の眼科検診を川崎医療福祉大学感覚矯正学科教授の高崎裕子先生と学生4人、日本視能訓練士協会顧問の守田好江先生が実施した。

検診したのは幼児、小学生の167人と中学生・成人の54人。幼児、小

モンゴルの子どもたちの目を救え

の実施を決めた。AMS A医学生国際交流プログラムでもある。

「Asian Medical Student Assocation」の略で1980年に設立された。最初は4カ国から始まり、現在は13カ国の医学生が参加、毎年の総会には400人の医学生が集っている。アジアで大学序列ナンバードワンとされるシンガポール大学の医学部には300人のAMS Aメンバーがいる。



モンゴルで実施された子どもたちの眼科検診

9月5日。モンゴル保健省内で「子どもたちの目を強化するフォーラム」がビャンバスレン保健副大臣やエンフバット保健局長の参加のもとに開催された。主催はAMD Aとモンゴル眼科協会。次の3点が結論となった。①子どもたちの目を設定。学校検診の普及②検眼士制度の設立③フォーラムの毎年開催。来年はモンゴル家庭医協会との共催予定――。

モンゴルでは眼科医の数は181人、家庭医の数は957人である。小中学生の検診事業の推進と普及には家庭医との協力体制は不可欠である。更に、モンゴル出身力士らにキャンペーンへの協力をしてもらおう案も出ている。エンフバット保健局長は高知医科大学大学院生の時に、若き朝青龍が高知市にある明德義塾高校に留学するきっかけを作ったとされている。ナンギルラクチャー村長(43)と「Land of 果樹サジ」構想を決定した。サジの正式名はシーバックソーン。ユーラシア大陸の中北部に野生するグミ科の植物。ビタミンCが豊富でビタミンAやビタミンEを含む。ジャムや果実酒として食用されている。目的は沙漠緑化、村の職起し、利益による人材育成である。

グチンウスとは30カ所の水の意味。ダンザワ村長は5年前から村内で試験的育成に成功。村から500坪の位置を流れる川沿いを活用する構想がある。2年目からはサジの苗に水を補給する必要がなくなる。3カ年計画で目標は4000本。1本の苗は1500円。ホームページを通して世界中に協力を呼びかける考案である。

AMD Aは7年前からモンゴルでプロジェクトを継続して実施している。一番大切な信頼にもとづく人間関係の確立に手応えを感じている。モンゴルの子どもの目を救う検診プロジェクトに「Land of 果樹サジ」構想を加え、プライマリケアプログラムとして包括すると共に、AMD AとAMS Aの連携する国際協力プログラムとしても位置付けたい。今後ともに皆様方のご理解とご支援をいただければ望外の喜びである。(AMD Aグループ代表)